新富町文化財調査報告書　第 31 集

町内遺跡 17

平成12年度町内遺跡発掘調査概要報告書
（祇園原横穴墓群・祇園原地区遺跡 7 ～12次・越馬場遺跡 2 次）

2 0 0 1

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

序

新富町の文化財保護については日頃から深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

本年度も町内の開発行為にともなう８遺跡を発掘調査をいたしました。

祇園原横穴墓群は古墳時代後期を中心に築造された祇園原古墳群の中にあります。今回の発見が同古墳群での初めて横穴墓の調査で、古墳時代終末期の古墳群の様相を知る重要な調査です。

祇園原地区遺跡の調査では事業原因の異なる３事業で計６箇所の調査が行われました。昨年度に続いて馬の埋葬土坑の検出や、前方後円墳の周溝の調査等、古墳群の全体像を復元する資料が蓄積されました。

越馬場遺跡では遺構が発見されませんでしたが、調査の進んでいない富田地区の状況を知るための重要な基礎作業です。

本町はこれら文化財の保護を推進し、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

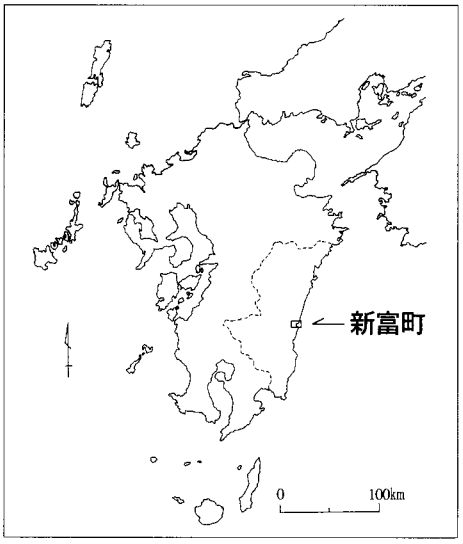
平成13年３月　　新富町教育長　清　　郁　雄

例　言

1．本書は平成12年度に宮崎県児湯郡新富町教育委員会が実施した周知の遺跡地における緊急発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は、一部を除き国庫補助事業「町内遺跡発掘調査等」を適用して行った。
3．各遺跡の調査期間は本文中の表１～３に明記した。
4．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測にて作成した200分の１測量図をもとに作図した。
5．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。
6．遺構実測は、有馬義人、新森美穂、小守容子がおこなった。
7．遺構・遺物の写真は有馬が撮影した。
8．整理作業は有馬、新森、小守で行い、遺物実測及びトレースは有馬、小守が行った。
9．本書の執筆・編集は有馬がおこなった。
10．出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会社会教育課に保管してある。

本文目次

1．はじめに……１～４ページ
2．祇園原横穴墓群……５～８ページ
3．祇園原地区遺跡７～12次調査……９～12ページ
4．越馬場遺跡……13～15ページ



新富町位置図

1．はじめに

Ⅰ．新富町の位置と概要

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に位置し、県庁所在地である宮崎市から約20km北にある。

北西部から南東部にかけては一ツ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。町面積は南北約７km、東西約９kmの約61km²で、隣接する市町村には西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町がある。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業で、台地の中心部には陸上自衛隊新田原基地があるため「やさいと基地の町」のイメージが強い。人口は約19,000人で、近年の道路交通網の整備にともない本町での宅地開発が活発になっているため、不況下にあっても人口は緩やかな増加傾向にある。

Ⅱ．新富町の文化財保護

町では昭和43年に文化財保護審議委員会を設置し、町内の文化財保護を推進している。指定文化財は国指定２、県指定２、町指定６があり、内訳は史跡２、天然記念物３、無形民俗３、有形文化財２である。

天然記念物には湯之宮座論梅・春日のイチョウ・アカウミガメがある。それぞれ下草管理や徒長枝剪定などを行っている。アカウミガメは列島的な海岸面積の減少に関係してか毎年上陸頭数が少なくなっており、県下一斉の保護対策が求められている。無形民俗文化財には湯之宮棒踊り、元禄坊主踊り、新田神楽がある。各団体の自助努力により活発な活動が行われており、後継者を含めた総合的な支援が求められる。有形文化財には三納代神社の釈迦如来座像と厳島神社の薬師如来立像があり、ほかに保存状態の良くないものや製作年代の古いものが多い。

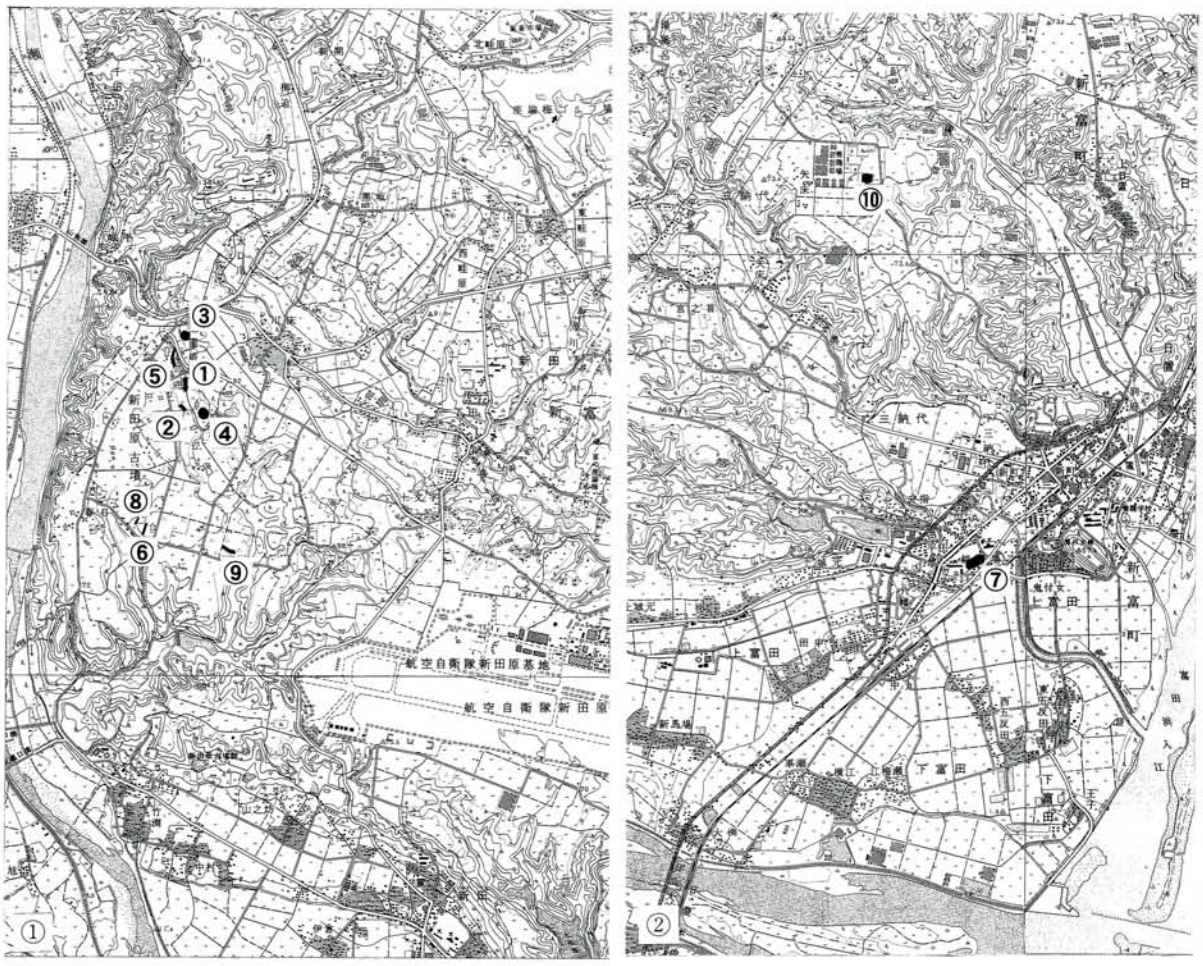
埋蔵文化財は開発行為によって消滅する頻度が高いため、年間を通じて調整・調査を行っている。史跡では国指定新田原古墳群の史跡整備を進行中で、平成９年度から発掘調査を行っている。短期整備では平成15年度から墳丘復元等の大規模整備を計画中である。また町ですすめる総合文化公園整備事業で既存の文化会館のほかに図書館・歴史資料館を建設する予定があり、この歴史資料館（仮称）を中心に古墳群やその他文化財にガイダンスや案内板を設置し、見学や学習に寄与しようと考えている。

Ⅲ．埋蔵文化財の調査

昭和50年代に始まった畑地帯のほ場整備にともない、埋蔵文化財発掘調査がかなりの面積にわたってを行われてきた。これら大規模調査の成果によって、1982年に行った遺跡詳細分布調査における「周知の遺跡」の数は飛躍的に多くなったものと考えられる。

近年の町内における開発行為は区画整理や畑地のほ場整備など大規模開発が終息しつつある一方、東九州縦貫道や県道の整備、農道整備にともなって周辺の小規模開発（宅地開発・町道整備など）が多発する現状にある。現在個々の事業に対し、個別に対応し事業調整を行っているが、調査成果を含めた「第２次詳細分布調査」を実施すべきであろう。

本年度の調査は以下の体制で行った。



① 祇園原地区遺跡（第７次）
② 祇園原地区遺跡（第８次）
③ 祇園原横穴墓群
④ 百足塚古墳
⑤ 祇園原地区遺跡（第９次）
⑥ 祇園原地区遺跡（第10次）
⑦ 越馬場遺跡
⑧ 祇園原地区遺跡（第11次）
⑨ 祇園原地区遺跡（第12次）
⑩ 一ツ瀬遺跡

第１図　平成12年度に調査した遺跡（1／25,000）

【調査体制】

総　　括　清　　郁雄（新富町教育委員会教育長）
　　比江島年見（同　　社会教育課課長）
　　富田　次男（同　　社会教育課課長補佐兼社会教育係長）
庶　　務　杉田　伸子（同　　社会教育課副主幹：庶務担当）
調整・調査　有馬　義人（同　　社会教育課主事：文化財担当）
調査補助員　新森　美穂（同　　社会教育課嘱託：埋蔵文化財調査補助員）
参加学生　芝原知行（天理大学４年）、松野圭太、落合賢一（宮崎大学４年）
　　古屋美樹、野村健一郎（別府大学４年）、児玉健作（奈良大学３年）
　　冨田綾（東洋大学１年）
作業員　小守容子、杉尾美千子、野尻富子、日野仁美、滝口則雄、滝口恵美子
　　日野君代、岩下ヨシ子、新恵トシ子、有田具子、出井クニ、江口栄子
　　河野隆子、寺原利雄、岩本栄

表１　平成12年度発掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内容	検出遺構
1	祇園原地区7	新田14788-1	7/12～ 8/23	新富町長	2,000	町道改良	前方後円墳の周溝
2	祇園原地区8	新田14951-2	8/24～ 9/12	児湯農林	318	一般農道７	馬の埋葬土と周溝１基
3	祇園原横穴墓群	新田14951-2	9/ 6～ 9/29	黒木義信	300	山林造成	路線区間に遺構検出せず
4	百足塚古墳	新田字東俣	4/20～ 3/30	新富町長	2,000	史跡整備	前方後円墳の周溝調査
5	祇園原地区9	新田15844-2	10/ 2～10/13	児湯農林	303	農地保全７	溝状遺構
6	祇園原地区10	新田14516-2	10/16～10/27	児湯農林	30	農地保全21	溝状遺構
7	越馬場遺跡	上富田8017-8	11/ 1～11/30	新富町長	1,000	区画整理	土師器片
8	祇園原地区11	新田14226	12/23～12/27	児湯農林	69	農地保全23	溝状遺構１
9	祇園原地区12	新田14415	1/15～ 1/31	児湯農林	512	一般農道20	土坑１、溝状遺構２

表２　平成12年度試掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内容	備考
1	一ツ塚遺跡	三納代	8/30～ 9/ 4	児湯養鶏	42	鶏舎建設	戦時中の滑走路あり
2	祇園原地区	新田14936-5	7/10	児湯農林	845	一般農道10	削平され遺構なし
3	祇園原地区	新田14681-1	7/15	児湯農林	321	一般農道11	削平され遺構なし
4	祇園原地区	新田14667-1	8/11	児湯農林	742	一般農道12	削平され遺構なし
5	祇園原地区	新田14640-2	8/20	児湯農林	217	一般農道13	削平され遺構なし
6	祇園原地区	新田14336-4	1/20	児湯農林	1474	一般農道21	削平され遺構なし
7	祇園原地区	新田	9/13	児湯農林	200	農地保全16	削平され遺構なし
8	祇園原地区	新田15864-8	9/27	児湯農林	29	農地保全15	削平され遺構なし

表３　平成12年度立会調査一覧

	遺跡名	所在地	調査日	申請者	面積	内容	備考
1	祇園原地区	新田14637-4	8/13	児湯農林	230	一般農道14	既堀
2	祇園原地区	新田14600-2	8/25	児湯農林	351	一般農道15	既堀
3	祇園原地区	新田14669-2	10/11	児湯農林	258	農地保全11	既堀
4	祇園原地区	新田14658	11/3	児湯農林	36	農地保全14	既堀
5	祇園原地区	新田14520	12/3	児湯農林	16	農地保全16	既堀
6	祇園原地区	新田14463	1/20	児湯農林	40	農地保全27	既堀

Ⅳ. 文化財啓発活動

生涯学習や学社融合の一環として、町内外から文化財についての講演や見学会、勉強会等の要望が寄せられることが多い。町教委ではこれらの要望に応えるため、文化財の普及啓発活動の一環として下記の事業を行った。

表 4　新富町の文化財啓発活動

月日	内　　容	講師・担当	対　象	人数
4/17	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	富田小６年	120
4/28	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	上新田小６年	40
5/11	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	富田小３年	120
5/19	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	新田小３年	100
5/19	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	新田小６年	80
5/15	湯之宮座論梅の学習（梅の説明・収穫）	有馬	上新田小５年	50
5/24	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	上新田小３年	40
7/13	町ルピナス学級古墳見学(百足塚古墳)	有馬	ルピナス学級	100
7/13	郷土史講座①「新富町の地名について」	新富町役場　有田辰美	郷土史講座生	20
8/20	子ガメを送る会（あかうみがめについて）	宮崎野生動物研　石井正敏	町内外希望者	200
11/22	郷土史講座②「新富町の中世社会」	宮崎大学　山田渉	郷土史講座生	30
1/20	郷土史講座③「新富町の史跡見学」	有馬	郷土史講座生	50
2/16	郷土史講座③「新富町の民俗芸能」	椎葉民俗芸能博物館　永松敦	郷土史講座生	20
1/15	新田原古墳群の見学(見学会)	有馬	高齢者教室	120
年内	富田小学校文化財愛護少年団活動	有馬	富田小５年	10

2．祇園原横穴墓群

Ⅰ．位置と調査の概要

一ツ瀬川左岸台地面に分布する祇園原古墳群は、日向地方最大の後期古墳群である。前方後円墳14基を含む154基の古墳が現存し、これまで消滅墳38基が確認されるため、いまのところ総数192基の古墳が確認できる。

古墳が集中する箇所は、東の高位台地面（標高90m）から西の中位台地面（標高70m）にかけての傾斜面と中位台地面一帯に及び、古墳群はこのような地形とそこに集中する範囲から、少なくとも４つのグループに区分できる。今回発見された祇園原横穴墓群はＡグループの北端部に位置し、高位台地面からの傾斜面に立地する。

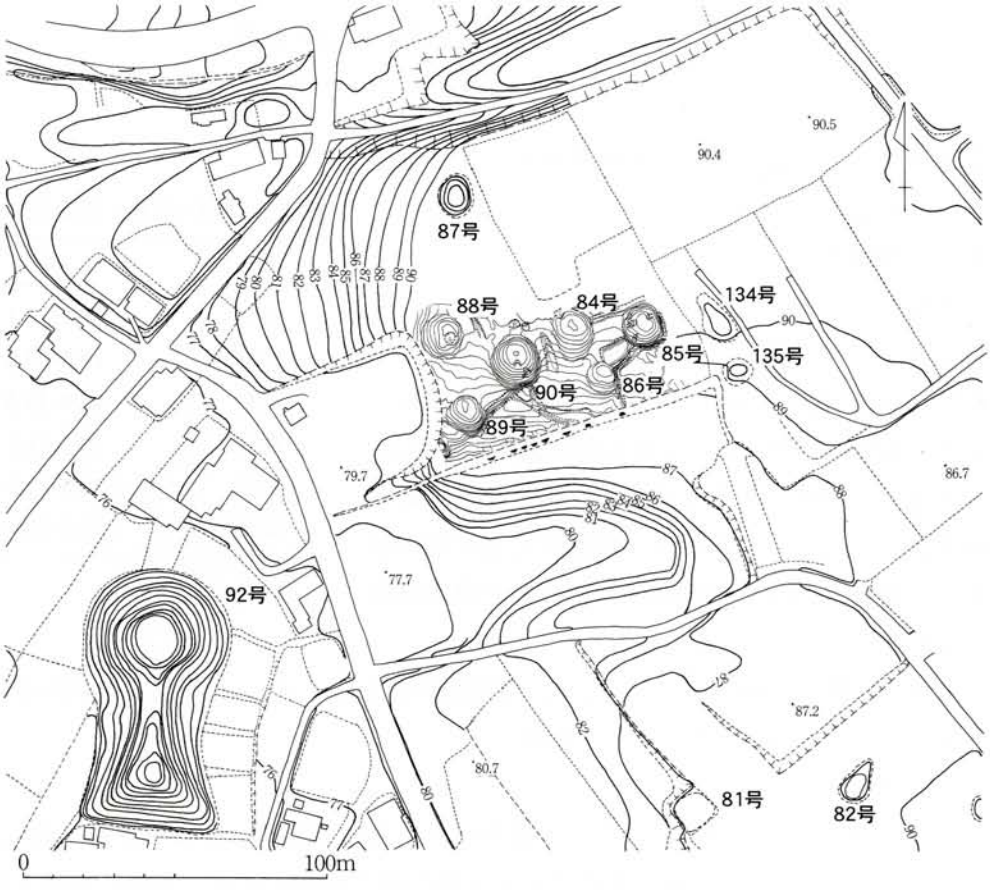
祇園原横穴墓群は隣接地の試掘調査の際に発見した。所在箇所を確認したところ、掘削法面に遺構の断面が確認できた。土地所有者に連絡したところ、昨年度から土の掘削を行い工事廃土を搬入しているという。表面を精査すると、空洞になる箇所が２カ所発見されたため、土地所有者と協議し、法面を中心に全面調査することで了解を得た。

調査の結果、２基の横穴墓と６カ所の墓道、そして周溝１基が確認できた。調査区の北側には国指定84号墳ほか８基の国指定の円墳がある。本横穴墓群はこれらを後背墳丘として築造された可能性が高い。

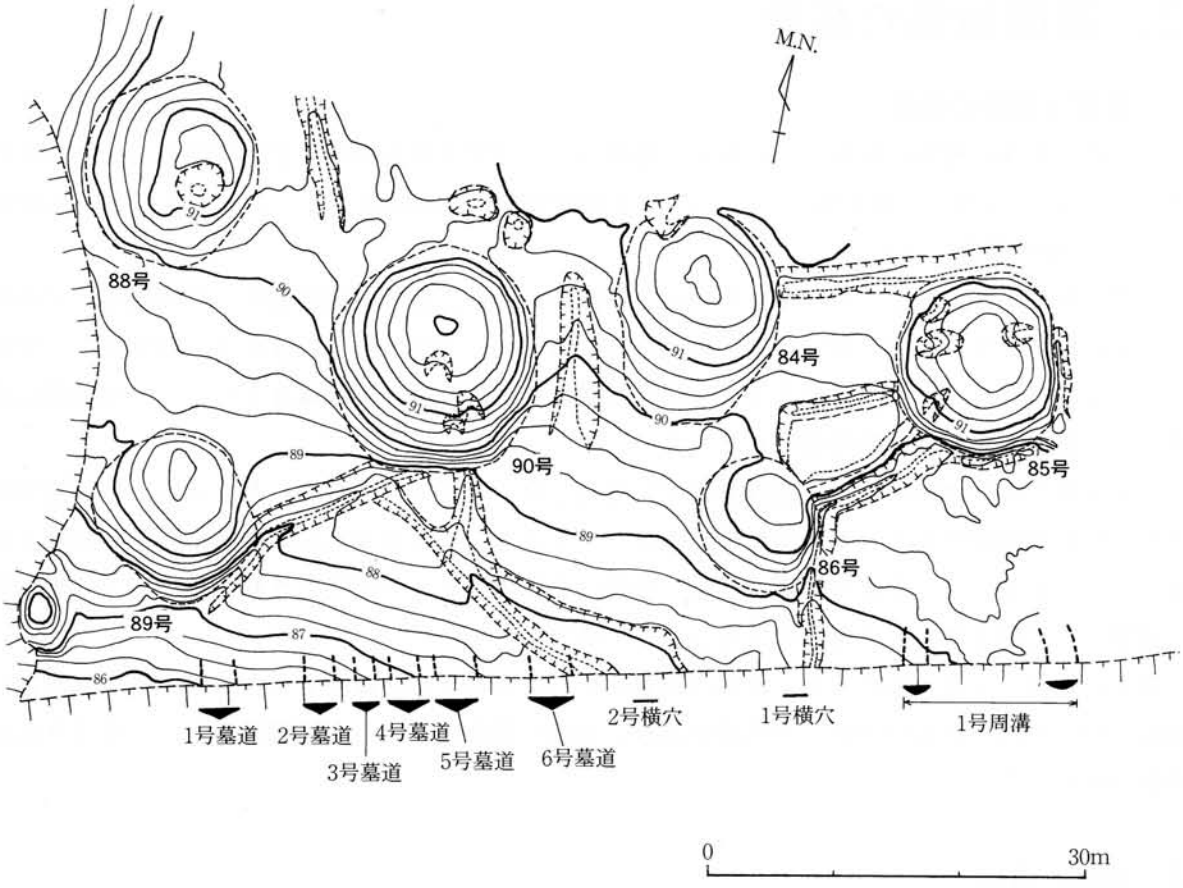
Ⅱ．遺構と遺物

(1) 遺跡の概要

横穴の上位台地面には国指定新田原84号から135号の円墳が８基所在する。横穴墓とこれら円墳の位置関係を把握する目的で、全体の墳丘測量を行った。測量は１／200で測量し、等高線間隔25cmで作図した。調査の結果、測量できた円墳の計測値は表４のとおりである。最大規模は90号墳で、



第２図　祇園原横穴墓群の位置（1／2,500）



第３図　調査区（1／600）

発見された横穴墓はそれらを後背墳丘として築造された可能性が高い。

⑵　１号横穴

玄室の半分以下しか遺存せず、全体の形状は不明である。最大幅2.4m、奥壁幅1.8m、現存する奥行1.1m、現存する天井部の高さ0.7mを測る。玄室の側壁・奥壁沿いには排水溝が施されている。

玄室内に明確な屍床は造らず、礫と須恵器杯を配置する程度と考えられる。奥壁の左右には穴があり、奥行き20cmまで掘削されているが横穴築造の際の堀方か判然としない。

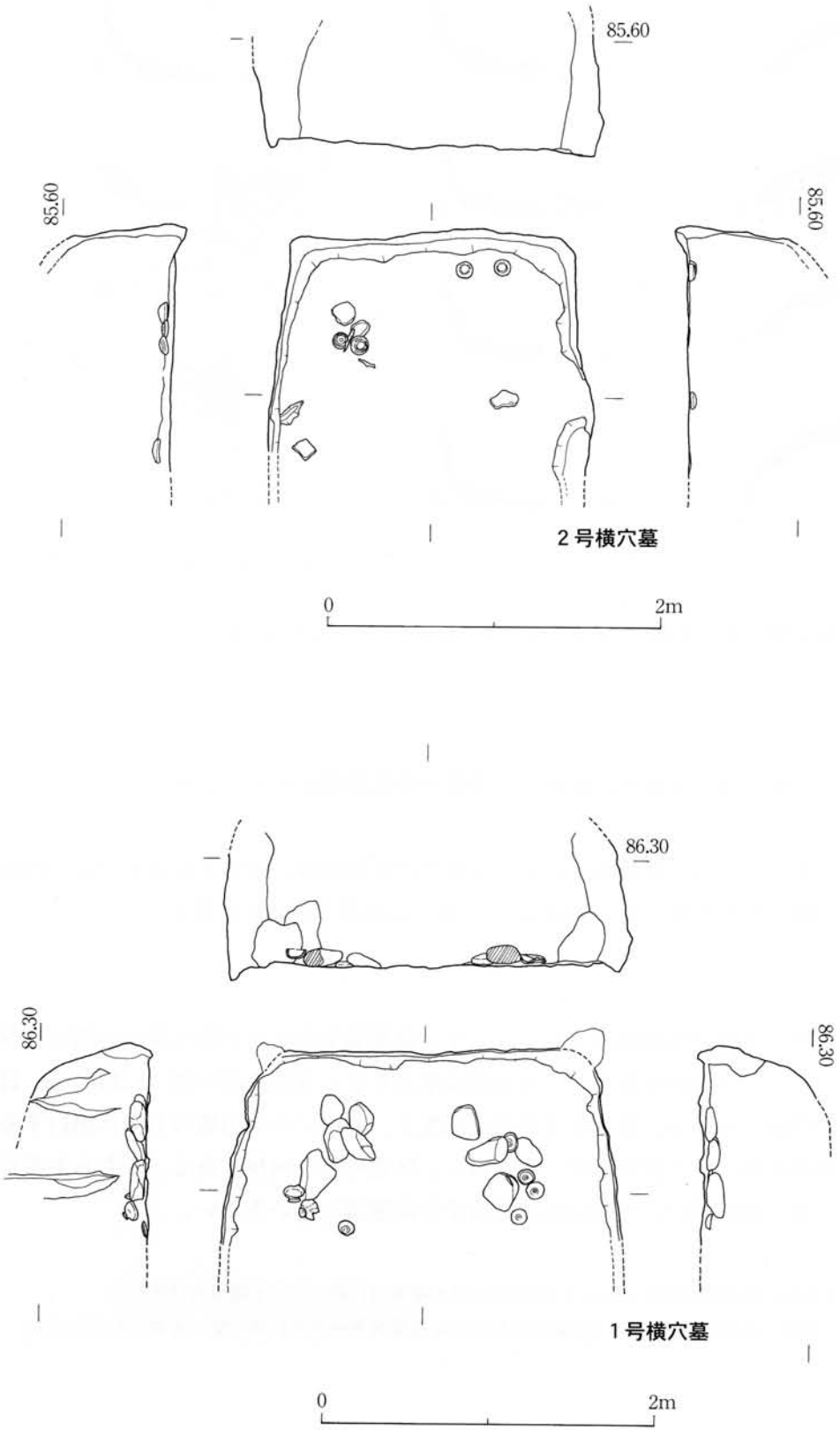
表４　調査（測量）古墳の計測値（m）

名称	径	高さ
84号	18.2-23.7	3.5
85号	18.6-20.0	3.5
86号	13.0-15.4	3.5
88号	19.4-21.2	3.5
89号	16.0-19.0	3.5
90号	23.2-25.0	3.5

遺物は左側壁で高杯２点（10,11）、須恵器杯蓋１点（３）、右側壁側で須恵器杯蓋２点（１.２）、同杯身１点（５,６）、刀子１点を検出した。

⑶　２号横穴

１号と同様に玄室の半分以下しか遺存せず、全体の形状は不明である。最大幅1.95m、奥壁幅1.7m、現存する奥行1.5m、現存する天井部の高さ70cmを測る。玄室の側壁・奥壁沿いには排水溝が施されている。



第4図　横穴墓（1／40）

玄室内に明確な屍床は造らず、礫と須恵器杯を配置する程度と考えられる。

遺物は左測壁側で須恵器杯蓋1点（4）、須恵器杯身1点（8）、刀子2点、奥壁側で須恵器杯身2点（7，9）を検出した。

(4)　出土遺物

1号、2号の玄室と削平土の中から若干の遺物を検出した。刀子3点、鎹1点は現在保存処理中である。1号、2号の土器類のみ以下で説明する。

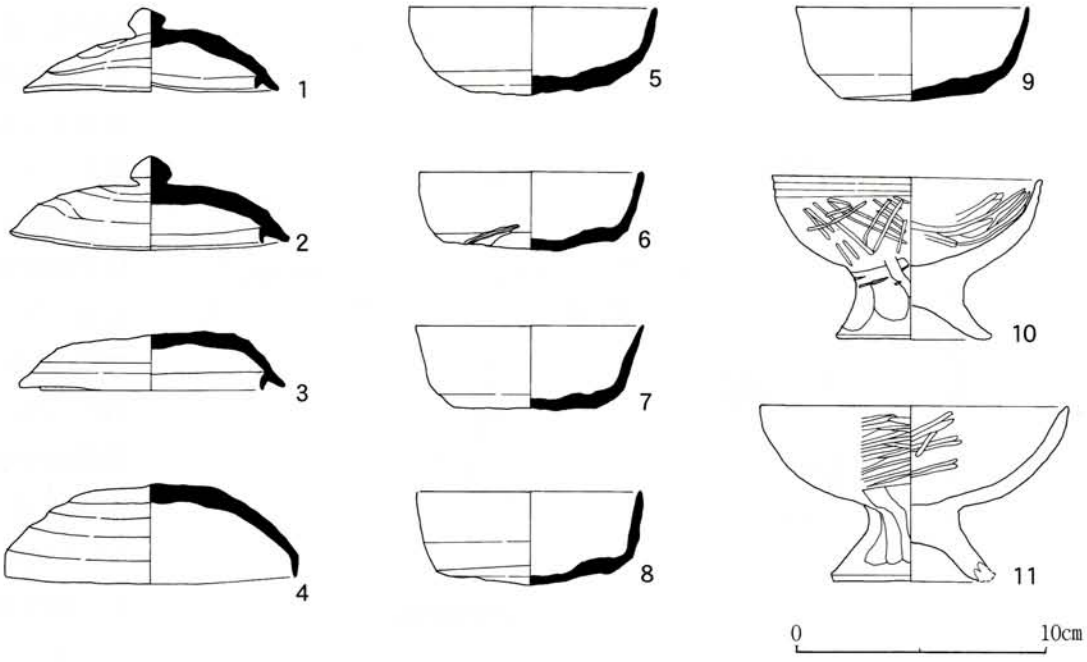
①須恵器

杯蓋（1～4）

4以外は立上りのある個体である。口縁径は1が8.5cm、2が8.4-9.1cm、3が8.5cm、4が10.9-11.5cmで、1・2には摘みが付く。

杯身（5～8）

いずれも立上りのない個体である。口縁径は5が9.7cm、6が8.7cm、7が9.1cm、8が8.8-9.5cmである。



第５図　出土土器（1／3）　４、７～９号は２号、ほかは１号

② 土師器

短脚高杯、椀がある。椀は破片資料で、表採品で遺構の帰属関係がわからない。

高杯（12）

ほぼ完形の２個体がある。体部に稜線のない丸みを帯びた杯部に短い脚部を付けている。内外面にミガキを加え、口縁にナデを加える。10は高さ6.4cm、11は高さ12.4cmを測る。

Ⅲ．まとめ

これまで祇園原古墳群には横穴墓が確認されておらず、高塚墳全体を含む終末期の古墳の状況が判然としなかった。１号・２号から出土した須恵器は隼上りⅡ～Ⅲ型式併行期[1]に該当し、日向地方の横穴墓築造の終盤にあたる。横穴墓は墓道を掘削し、背後にある円墳の方向に開口するだろう。その配置は西都市酒元ノ上横穴墓群[2]に近似し、築造時期も同様である。どちらも首長墓系譜を含む群集墳にあり興味深い。今後は保存措置を含め協議していきたい。

(1) 増田一裕　1995「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号　土曜考古学研究会

(2) 蓑方政幾・東憲章　1996「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集　西都市教育委員会

3．祇園原地区遺跡７・８・９・10・11・12次調査

Ⅰ．位置と調査の経緯

祇園原古墳群の北部にあたるＡ～Ｃグループが所在する台地面全体を祇園原地区遺跡と総称している。特に祇園原古墳群Ａグループは前方後円墳14基を含む古墳時代後期を中心とした古墳群で、径30m程度の中小円墳を含んだ階層構成型の群構造を示す。

平成４年度には祇園原地区遺跡のほぼ全面におよぶ圃場整備が実施され、この際の調査を１次調査、平成10年度の一般農道ほかにともなう調査を２・３次調査、平成11年度には同じく一般農道整備事業にともない、４・５・６次調査を実施している。

本年度は調査原因の異なる３事業にともない、７～12次の計６カ所の調査を行った。

その位置は第６図に示すとおりで、Ａグループの68号墳近接地（７次)、同64号墳近接地（８次)、92号近接地（９次)、170号近接地（10次)、133号近接地（11号)、Ａグループ南端部（12次）にあたる。

Ⅱ．調査の概要

①　７次調査

祇園原地区の集落から農地へ出る主要道路の改良のため、調査を行った。当該道路は戦前の造成時に68号墳（前方後円墳）の後円部西側を掘削して設置されており、今回拡幅する西側でも同古墳の周溝の存在が予見されていた。

調査は拡幅部の幅約３ｍ、長さ約73ｍを全面調査した。樹木など庭木の類が多くそれらの伐根から開始し、すべて人力で調査区を設定した。表土下20㎝前後でアカホヤ火山灰が検出できる。

調査区全面を表土除去したところ、図７のように68号墳周溝が検出できた。墳丘端部は現道にあって不明であるが少なくとも幅約８ｍの周溝が後円部に巡ることがわかった。遺物は少なく須恵器甕片６点、土師器甕片８点、埴輪片５点がある。埴輪は68号墳の墳丘から表採できず、周溝内で検出できた埴輪片は川西Ⅴ期の特徴を有する。周溝内からの出土点数は少ないので、68号墳築造時に樹立されたものではないと思われる。

なお周溝が検出された箇所は道路造成面の下層にあたるため極力遺構の保存を行い調査終了した。

②　８次調査

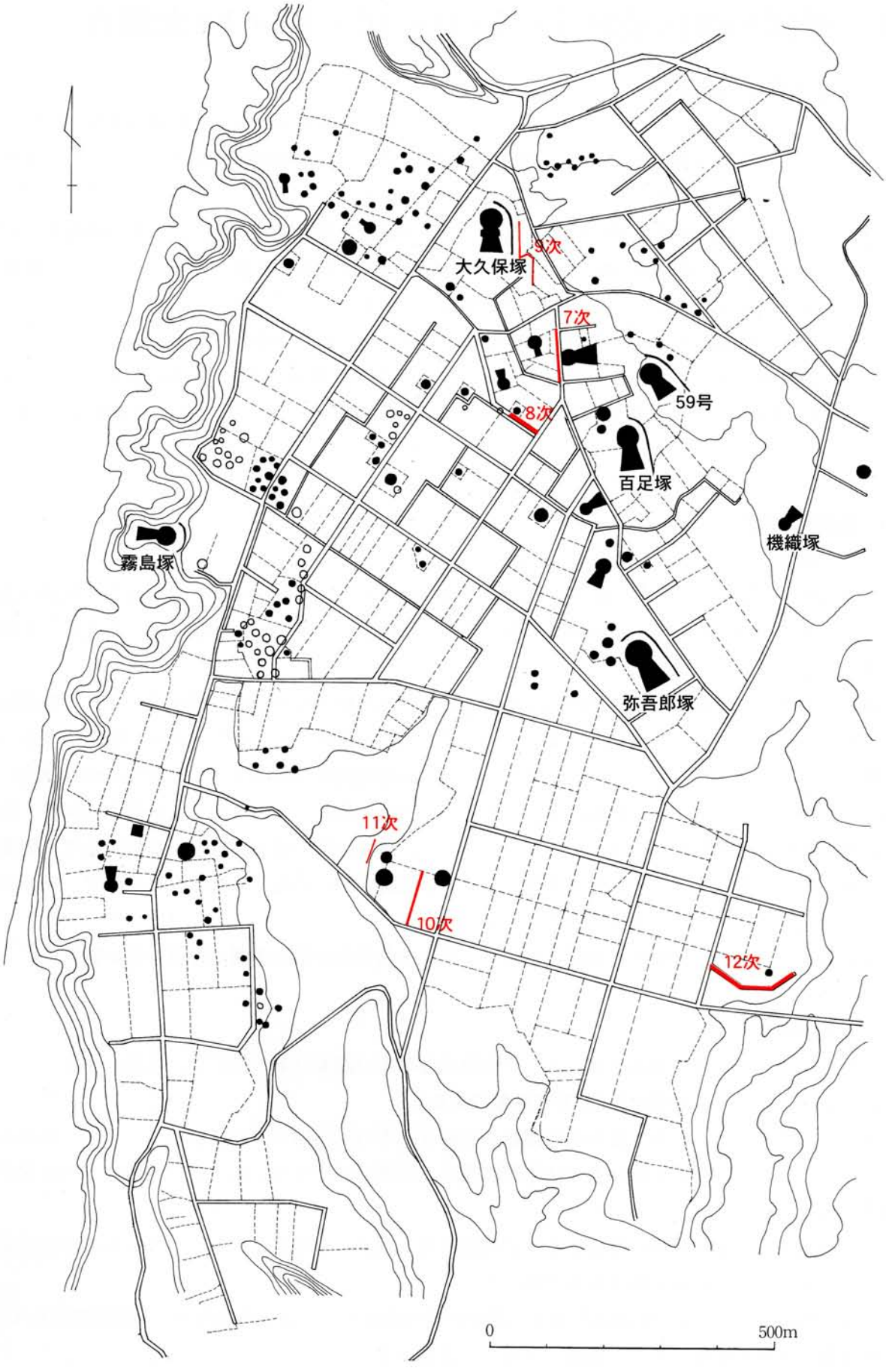
一般農道７号線が調査対象であった。７号線は昨年度の調査（第６次）で、北側を調査完了しており、今回は残りの南側237㎡が調査対象である。

調査区の地形は北から南へ緩やかに傾斜しており、その北端側に64号墳がある。南側は微低地になっている。したがって北側表土は比較的浅く、南側でアカホヤ上面における黒色土の堆積が顕著であった。

今回の調査区では64号墳の周溝とそれに付随する土壙が１基検出できた。いずれも遺存状態が悪く、土壙で深さ約20㎝を残すのみであった。

周溝は幅1.1-2.8ｍ、深さ約20㎝を測る。調査区間の攪乱土から須恵器甕片19、須恵器杯蓋片１、土師器甕片２点が検出できた。遺構にともなう遺物はない。

周溝に接して土壙１基が検出できた。先述したようにほとんど削平を受け底面が依存するのみ



第６図　平成10年度の祇園原地区遺跡の調査区（１／10,000）

第７図　７次調査区（1／800）

であったが、馬具が１対出土している。馬具は環状轡付輪鐙であり、土壙は64号墳の被葬者の埋葬にともない殉葬された馬の埋葬土壙であると想定される。

③　９次調査

農地保全事業にともない新田原92号墳（大久保塚古墳：前方後円墳）の東側の周溝近接地を調査した。周溝に近いことから２重周溝部や古墳に付随する施設が検出されることを予想して調査したが、溝状遺構１が検出されただけで、ほとんどの調査区内が削平攪乱されていた。特に調査区に沿って築かれた土塁上の高まりの直下には溝が掘削されており、地権者の話では以前に畑地保全のためこの種の溝を掘削することが多かったらしい。

出土遺物としては表土ならび攪乱土から土師器甕１、擦石１、石匙１、石鏃１がある。

④　10次調査

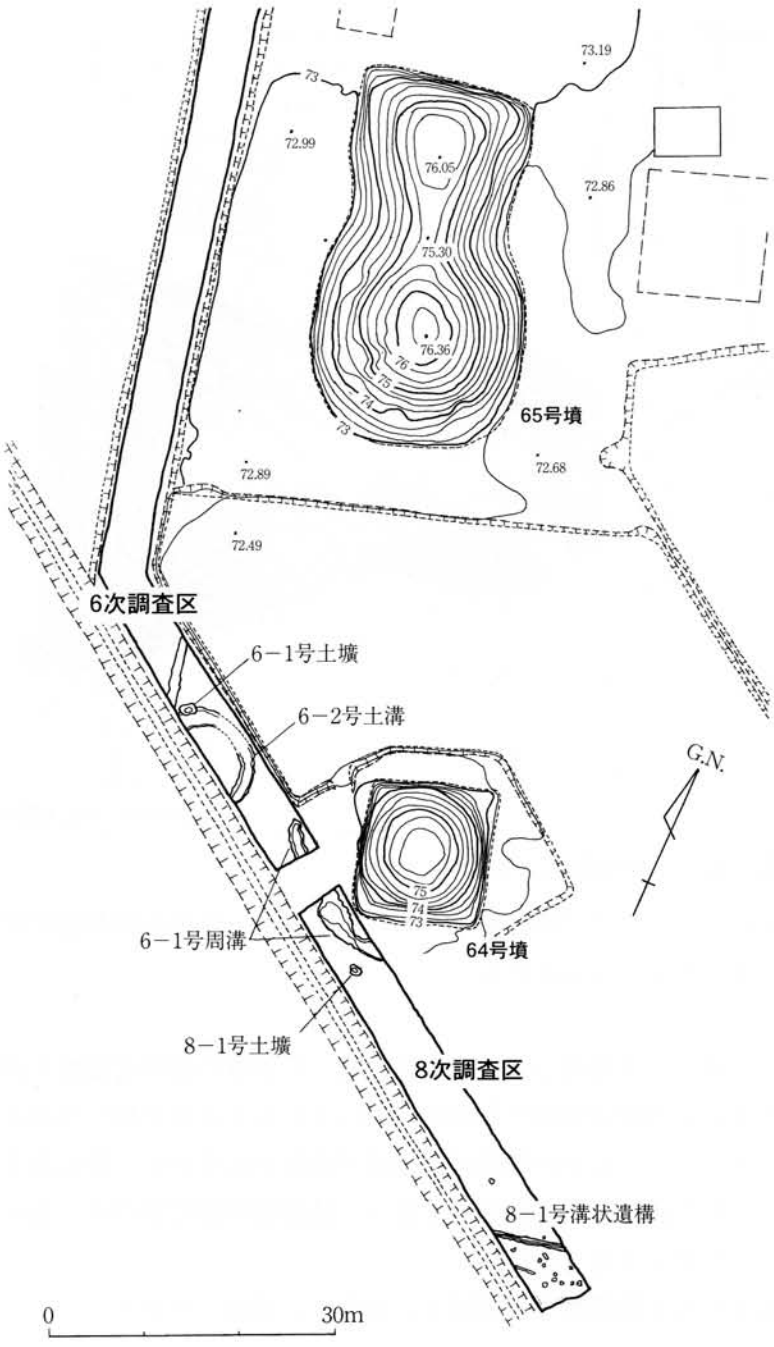
農地保全事業にともない指定170号墳の隣接地を調査した。指定170号墳は径約25mを測る円墳である。調査歴はない。

調査区はこの円墳の西側を幅１m、総延長84.5mにわたって調査した。

表土掘削をすすめたがかなり攪乱されており、約30cmでアカホヤ層が検出できた。調査区全面にわたって攪乱されており検出面における遺構は溝が１条だけである。遺物はいずれも攪乱土中から、須恵器杯片１、須恵器甕12片がある。

⑤　11次調査

農地保全第21号集水路の工事にともない、幅１m、延長31mを調査した。10次調査の西側に位置し、近接して指定墳133号がある。この調査区でも攪乱が深く、遺物の散布は認められたもの



第８図　８次調査区（1／800）

の、遺構としては時期不明の溝状遺構が１条検出できたに留まる。

遺物は攪乱土から、須恵器短脚片１、須恵器杯口縁片13、須恵器甕片５がある。

⑥　12次調査

一般農道21号線の工事にともない調査した。同路線の位置は祇園原古墳群Ａグループの南東端部である。　調査区は幅３ｍ、総延長60ｍの計180㎡に及び、南へ若干傾斜する形状である

調査は重機で表土掘削し、遺構検出面を確認した。すると調査区に中間で土壙１基、北側で溝状遺構２を検出した。

土壙は不整形である。幾つかの掘削単位が認められ、埋土のほとんどは地山のブロックで一斉に埋められたようで、遺物は検出面附近で土器片が集中しただけである。

溝状遺構は地権者の話では周辺の山林から畑地へ向けて竹の根が入り込むのを防ぐため掘削された溝で、昭和30年代に掘削されたものの可能性が高い。

土壙から検出できた土器類は甕、壺の破片で、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に該当する。

Ⅲ．まとめ

本年度の調査でも祇園原古墳群の内容を知る情報を得ることができた。７次調査では68号墳の周溝を検出できた。８次調査では６次調査に引き続き馬の埋葬土壙を検出でき、検出数を増やすことができた。今後の調査も徹底し、内容確認に努めたい。

なお一般農道・農地保全の調査は事業終了後に報告書を刊行する予定である。

4．越馬場遺跡第２次

Ⅰ．位置と調査の概要

新富町の市街地は国道10号線の改良以降、丘陵掘削や河川改修などでかなりの変貌を遂げている。この土地区画整理では、昭和43年の下屋敷古墳[1]の調査以降、河川改修に伴う鬼付女西遺跡[2]、園田遺跡[3]、富田１号墳[4]などの調査が行われ、弥生時代中期から近世にいたる重要な遺跡の存在が判明している。今回の越馬場遺跡における丘陵の削平は区画整理の最終段階である。

越馬場遺跡がある丘陵は、もともと新田原台地から東に派生した標高40～20mの丘陵である。あたかも独立丘陵のようにみえる現在の光景は道路や河川改修の結果であり、旧地形が残る場所は少ない。

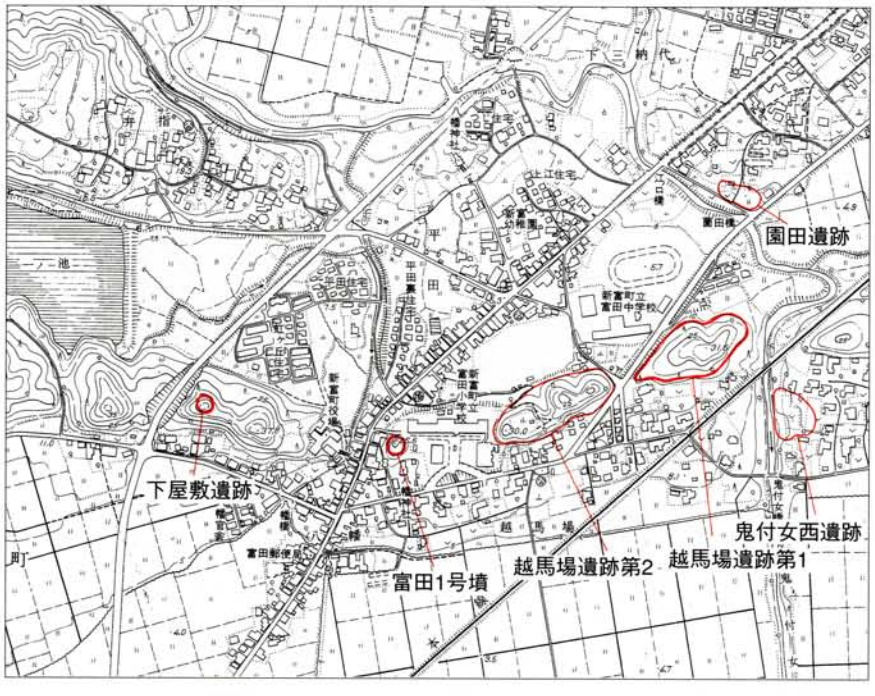
調査域周辺では昭和40年代に蔵骨器が出土したといわれ、宮崎県立総合博物館で所蔵される同品は13世紀後半の常滑焼である[5]。また慶長年間までには創建されていた弥勒寺（明治４年廃寺[6]や富田八幡神社も近接し、中近世の遺跡が多い。

昨年度の調査では西側の鬼付川右岸部の丘陵を調査し、山城の曲輪１の内容を知ることができた。

本年度の調査はその西側の丘陵が対象であり、山城の外郭施設や丘陵状の弥生時代や古墳時代の墳墓の存在が推測されたため、トレンチを配置し遺構検出に努めた。

丘陵は大きく２つの高まりがあり、トレンチは丘陵上の遺構の存在の有無や傾斜面での遺構の有無を確認するため、合計16本配置した。

結果、遺構は確認できず、12,5,7,6の４本のトレンチから土器片21片が検出できたに留まった。



第９図　越馬場遺跡と周辺遺跡（1／1,000　昭和40年代）

Ⅱ．遺構と遺物

①　遺構

遺構は検出できなかった。傾斜面端部に東西方向に防空濠が３カ所掘削されており、その開口部は厚いコンクリートで密閉されている。

②　遺物

12トレンチから土師器片14点、５トレンチから土師器片１点、７トレンチから弥生土器片１点、６トレンチから弥生土器片５点が検出できた。

第10図　越馬場遺跡第２次調査区（1／400）

Ⅲ．まとめ

今回の調査では当初予想された遺構は検出できなかった。しかし、弥生中期前半と古墳時代後期に該当する２時期の遺物を検出できた。

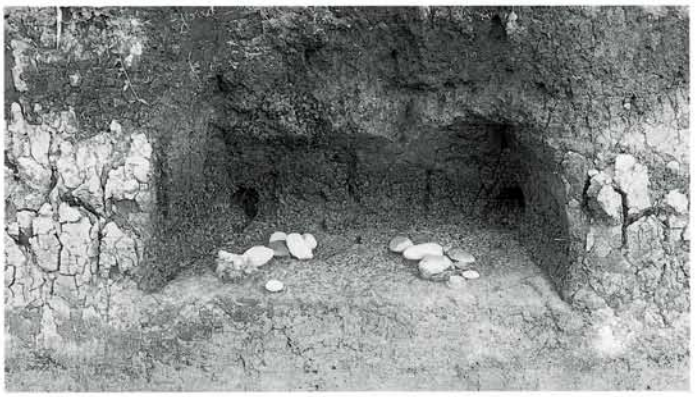
弥生中期前半の時期に該当する土器の検出は町内では、鐙遺跡、越田遺跡に続き３カ所目になる。いずれも痩せ尾根上で遺物が検出できた例であり、こういった土地の利用のされ方が興味深い。

今回の調査区周囲の低位段丘面では古代を中心とした土師器片が多く表採できるため、今後の調査調整に努めたい。

(1) 新富町教育委員会「下屋敷古墳発掘調査概報」『宮崎考古』第７号　宮崎考古学会　1980
(2) 永友良典「鬼付女西遺跡」『宮崎県史』資料編考古２宮崎県　1993
(3) 永友良典「園田遺跡」『宮崎県史』資料編考古２宮崎県　1993
(4) 有馬義人「富田１号墳」『新富町文化財調査報告書』第23集　1997
(5) 東憲章「宮崎県の常滑焼集成」『宮崎考古』第13号　1996
(6) 「新富町史」資料編　1992

図版一　祇園原横穴墓群

祇園原横穴墓群全景



1号横穴

1号横穴遺物出土状況

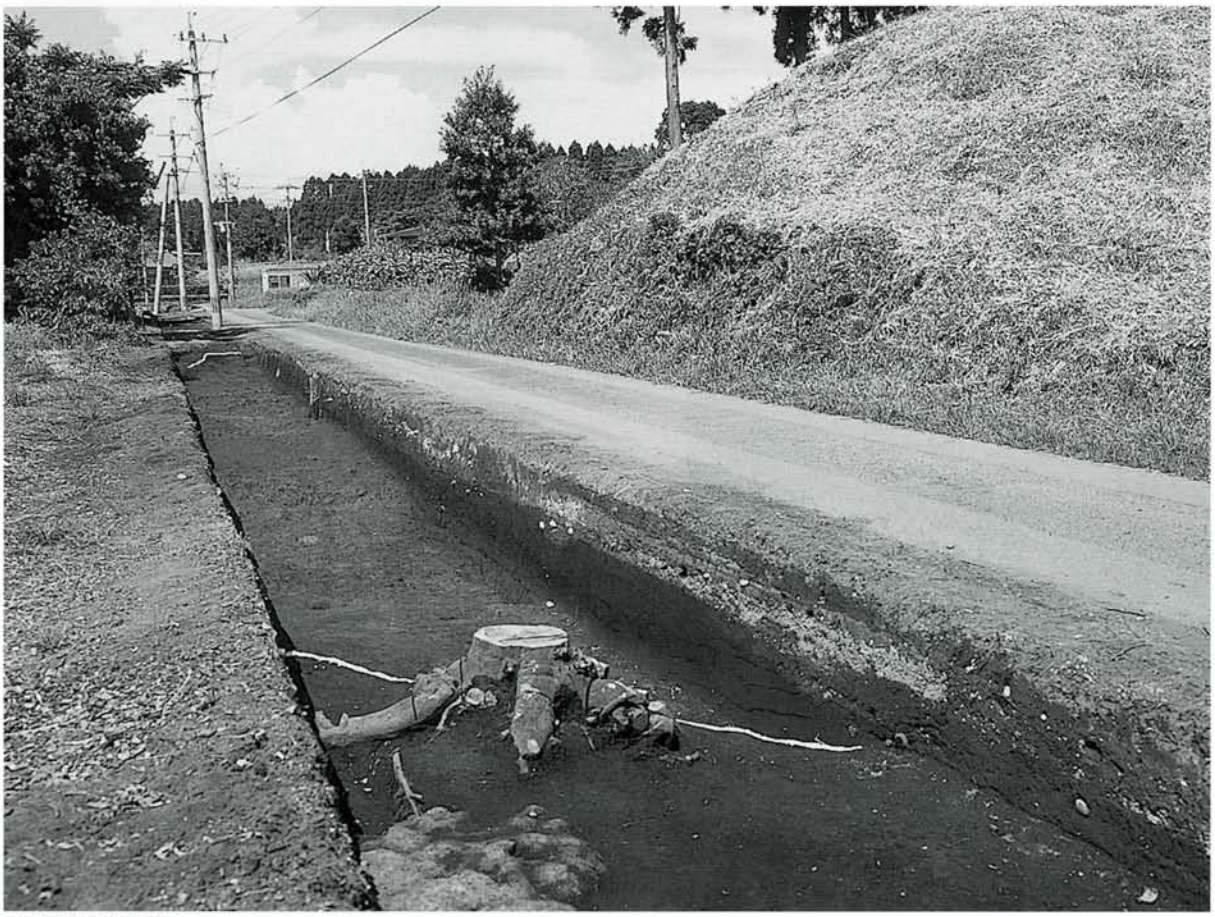
2号横穴

1号横穴遺物出土状況

図版二　祇園原地区遺跡（7次）

調査区全景

調査区と68号墳



68号墳の周溝

図版三　祇園原地区遺跡（8次）

8次調査区全景

6－1号周溝と8－1号土壙

8－1号土壙

8－1号土壙　馬貝出土状況

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせき
書名	町内遺跡17
副書名	平成12年度町内遺跡発掘調査概要報告書
巻次	17
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	有馬義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	2001年　3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
祇園原横穴墓群（ぎおんばるよこあなぼぐん）	大字新田字祇園原（にゅうた ぎおんばる）	47	1001	000906～000929	2,000㎡	個人開発
祇園原地区遺跡７次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字東俣（にゅうた ひがしまた）	47	1001	000712～000823	318㎡	町道拡幅
祇園原地区遺跡８次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字東俣（にゅうた ひがしまた）	47	1001	000824～000912	300㎡	一般農道
祇園原地区遺跡９次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字祇園原（にゅうた ぎおんばる）	47	1001	001012～001013	303㎡	農地保全
祇園原地区遺跡10次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字瀬戸口（にゅうた せとぐち）	47	1001	001016～001027	30㎡	農地保全
祇園原地区遺跡11次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字瀬戸口（にゅうた せとぐち）	47	1001	001223～001227	69㎡	農地保全
祇園原地区遺跡12次（ぎおんばるちくいせき）	大字新田字曲久保（にゅうた まがりくぼ）	47	1001	010115～000131	512㎡	一般農道
越馬場遺跡２次（こえんばばいせき）	大字上富田字越馬場（かみとんだ こえんばば）	47	－	991201～000131	3,140㎡	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祇園原横穴墓群	古墳	古墳時代	横穴墓	須恵器・土師器・刀子・鏃	消滅墳の周溝
祇園原地区遺跡７次	古墳	古墳時代	古墳周溝	土師器・須恵器・埴輪	68号墳の周溝
祇園原地区遺跡８次	古墳	古墳時代	古墳周溝 埋葬土壙	須恵器・土師器・馬具	馬の埋葬土壙
祇園原地区遺跡９次	散布地	古墳時代	溝状遺構	土師器・擦石・石匙・石鏃	－
祇園原地区遺跡10次	散布地	古墳時代	溝状遺構	須恵器	－
祇園原地区遺跡11次	散布地	古墳時代	溝状遺構	須恵器	－
祇園原地区遺跡12次	散布地	縄文弥生	土壙・溝	土師器	－
越馬場遺跡２次	散布地	弥生・古墳	－	弥生土器・土師器	－

新富町文化財調査報告書　第31集

町内遺跡 17

発行年月日　２００１年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ